

「庭の仏様」

飯野文彦

「おい、庭に仏様が来ている」

祖父が言った。私は答えた。

「そう、良かったね」

「ああ、ほんとうにありがたいことだ」

祖父は、流しに向かって、コップに水を入れる。

「飲むなら、ここで飲めばいいのに」

またあちこち零したら、母さんに叱られるから……とまで言う前に、

「おれが飲むんじゃない。仏様にあげるんだ」

と言って、祖父は台所から姿を消した。

今度は仏様かと思いつながら、私は洪茶を啜った。時刻は午前十一時を回ったところである。私は二階にある自室から降りてきたばかりだ。仕事と称して明け方近くまで起きていた。そのくせ原稿は進まず、隠しておいた焼酎のボトルを一本空けていた。完璧なる二日酔いである。

私、井之妖彦は、当年取って四十路を迎えた。都落ちして実家に転がり込んで、早一年近くになる。実家には父と母と、さらに九十五になる祖父がいる。六十代後半の父と母はまだまだ元気で、二人してシルバー人材センターなるところに登録し、働きに出ている。

今日も起きたときには、とうに二人の姿はなかった。だが、祖父は半分棺桶に足を突っ込んだ状態だ。一人にしておくのは危ない。私が帰省するまで、母が家にいたのだが、今では私が祖父の監視役を仰せつかっている。

祖父は長年、小学校の教員を務めてきた。かつて私が家にいた頃、つまり東京の大学に合格して上京するまでは、孫の私にも厳格で厳しく、敬語で会話したものである。しかし今では、ぴしっと一本通っていた背筋を抜かれ、前屈みのかっこうでへらへら笑ってばかりいる。それでも身の回りの世話は、自分でできるし、徘徊するようなこともなく家の中におとなしくいてくれるので、私でも監視役がこなせるのである。

私が渋茶を飲み干し、ぼんやりしていると、祖父が戻ってきた。

「おい、おまえも、挨拶しなさい」

「誰か来たの？」

「さつきも言ったじゃないか。仏様が庭にいらっしやってるんだ」

「ああ、そうか。でも、良いよ。別に用事もないから」

「おまえ、そういうもんじゃないだろう」

いつになく祖父は強情だった。食卓の自分の定位置（私から見て左隣になるのだが）に坐り、身を乗り出して、なおも言うのである。

「滅多にあることじゃない。ご挨拶しなさい。おまえが取りなしている間に、康夫と幹子さんにも電話をして、大至急帰ってくるようにさせるつもり——」

「わかったよ。挨拶する」

私は祖父の言葉を中断させ、

「ただし父さんや母さんのところに電話するのは、なしだよ」

と言った。そんなことをされたら、後で私が怒られる。

「しかし……」

なおも愚図る祖父を説得し、私は台所を後にした。念のため玄関に置かれた電話のコードを抜いてから、庭に向かった。

庭といっても、まさしく猫の額程度のものだ。道路に面したブロック塀のこちら側、こぢんまりとしたところに砂利が敷き詰められ、ところどころに盆栽が置かれている。

その盆栽とブロック塀の間の湿気ったところに、仏様がいた。シーツを巻きつけたよう

な白い衣装を着込み、座禪を組んでいる。

「おじやましております」

私を見て、微笑んだ。

「いえ、あの……」

サンダルを引っかけて、庭に出た。一メートルほどのところまで近づき、改めてその姿を見回す。後光がさし、全身も金色に輝いている。仏様としか思えない姿である。

「なあ、ありがたいことだ」

祖父がやって来て、私の隣に立ち、両手を合わせて念仏を唱えた。

「しかし、どうして家なんか……」

熱心な仏教徒でもないのだから、不思議に思つてとうぜんである。すると仏様は、微笑みながら、私を見上げて言った。

「素通りするつもりだったのですが、ぐうぜん康治さんにお会いして、つつい立ち去りがたくなつたので。ああ、康治さん、お水、ごちそうさまでした」

仏様の前に置かれたコップは、空になつていた。

「いえいえ滅相も。ああナンマイダブ……」

祖父はなお頭を垂れて、両手を合わせる。ところが、

「それで御札に、何か願い事を叶えてあげようと思うのですが」と、仏様が言った途端、祖父は顔を上げて言ったのである。

「昌子を連れてきてください」

昌子というのは、三年前に脳梗塞で倒れ、そのまま意識を取りもどさずに逝った祖母のことである。

「お祖父ちゃん、何を言い出すんだよ」

私が言っても、祖父は聞く耳を持たない。仏様の前にひざまずき、

「昌子を、昌子をどうか……」

とくりかえす。

「わかりました」

仏様は笑顔で言った。

「そんなことが、できるんですか？」

私が訊ねると、笑顔のままこくりと頷く。

「あなた。あなた、どこにいるの？」

家の中から声が聞こえてきた。ずいぶんと噎れてはいるが、耳に覚えがある祖母の声である。すくつと身体を起こした祖父は、

「ああ、今行くよ」

と返事をし、さらに、

「まったく、動けなくなってから、わしばかり頼りにして。わしがいるから、いいようなものの……」

と独り言を言いながら、仏様がいることも忘れたように、そそくさと家に入っていた。

「ほんとうに、お祖母ちゃんが？」

仏様は微笑みを浮かべたまま、

「それじゃ、お邪魔しました」

と言った。見る見るその姿が、薄くなっていく。

「あ、待ってください」

薄れながらも私を見上げ、首を傾けた。頭の中が真っ白になった。こんなチャンスは滅多にどこるか、二度とない。私も何か、お願いをしたい。しかし咄嗟のことなので、何も思い浮かばない。

どんどん仏様の姿が薄くなっていく。ああ消えてしまう。と思ったとき、気がついたら、

「どうです、一杯」

と言っていた。

「酒ですか？」

「ええ。まあ、せっかく来てくださったんですから」

そう言いながらも、まづかつたかと、心で舌打ちした。仏様は戒律に厳しく、酒など
以ての外、と怒り出すかもしれない。全身の血の気が音を立てて引いていくのがわかっ
た。すみません、つい、と土下座しようとしたとき、仏様はにっこりと笑って言った。

「いいですね。一杯やりませんか」

「ほんとうですか？」

「ええ。たまには、いいでしょう」

「わかりました。今すぐ持つてきますから」

私は家に駆け込み、台所に向かった。買い置きしてあった一升瓶の清酒と、コップを
二つ持つて庭に駆けもどる。仏様の姿はふたたびくつきりと金色に輝いていた。

「ああ、コップはこれで」

仏様は先ほど祖父が持つてきたコップを手にした。私は注いだ。すると仏様が一升瓶
を取り、私に注いでくれた。世の中広しといえども、仏様にお酌してもらったのは、私

だけではないだろうか。

「それじゃ、遠慮なく」

私たちはコップを合わせて、乾杯し、そして飲んだ。仏様は一息で飲み干し、
「ふう、おいしい」

と息をついた。私が一升瓶を持つと、遠慮しながらもコップをさしだす。うれしくな
って私も、一気に飲み干した。するとまたしても仏様が注いでくれた。二杯が三杯に、
三杯が四杯になるころには、ずいぶんと酒が回っていた。

「ねえ、仏様。世の中には悪い奴がいますね。どうして懲らしめないんですか」

「そんなやつらは、ほっとけ」

「ほっとけて……ああ洒落ですか。はははははははははは」

気がついたら一人大笑いしていた。笑いを止めたのは、母親の声だった。

「妖彦、おまえ、そんなところで何してるの？」

振り返ると、自転車を引いた母が、門の内側から、こちらを見ている。辺りはいつの
間にか、薄暗くなりはじめていた。

「何してるって、仏様とこうしてお酒を」

だが仏様の姿はない。辺りを見回してもいない。私は庭の砂利の上にあぐらをかいて、

一人で酒を飲んでいた。

「人目が悪い。ご近所さんに見つかる前に、中に入りなさい。まったく、仕事もしないで、何様のつもりなんだか」

「お言葉ですけどね。明け方まで書いてるんですよ。それに昼は昼で、お祖父ちゃんの面倒を見てるんですから」

私は立ち上がり、ふらつく足取りで、母に近づきながら言った。

「あんたが、お祖父ちゃんの面倒を？」

「そうでしょ。私がお祖父ちゃんの面倒を見ているおかげで、母さんも安心して働きに出られるんですよが」

「酒臭い。もう、何をわからないことを。いいから入りなさい」

私は母に身体を押されて、家の中に入った。奥から祖父の声がした。

「幹子さんかい？」

「はい。遅くなりました」

母はそそくさと台所に向かう。私も後に続いたのだったが、驚きのあまり、廊下に立ち尽くす。食卓では、祖父が血まみれの老婆に寄り添い、スプーンでお粥を食べさせていた。

「お義母さん、具合はどうですか？」

「相変わらずですよ。ありがとうございます」

血まみれの老婆は、お粥を咀嚼しながら言った。

「着替えてすぐに来ますから」

母親が台所から消えた。

「おい、妖彦、ちよつと便所に行つてくるから、代わつてくれ」

祖父はそう言つて立ち上がり、よたよたと台所から出て行つた。後に残つたのは私と血まみれの老婆だけである。

血まみれというだけではない。よく見ると肉が腐つて、あちこちから粘液が滴り、骨が露出しているところもある。髪の毛の薄い頭部で蠢いているのは蛆虫だった。

「あのね。あなたにはどう見えるかわからないけれども、まあこうなつたんだから、ごちやごちや騒がないで、ちようだいね」

老婆が片手で頭を搔くと、蛆虫がぼろぼろとこぼれ落ちる。

「何だよ、代わつてくれと言つたのに。……ほらほらご飯をつづけようね」

戻つてきた祖父は、ふたたび老婆の隣に坐り、スプーンを手にした。

「だめじゃないか。食べこぼしたりして」

食卓に落ちた蛆虫を、お粥と間違えて、つまみ、自分の口に入れる。もぐもぐ顎をこかしながら、お粥をすくい、老婆に食べさせる。

祖母は脳梗塞から助かったものの、半身不随になった。それまで厳格だった祖父は、がらり人が変わったように、献身的に介護している。

対して、一年前に都落ちして帰ってきた私は、まったく祖母の面倒をみようと思わず、酒ばかり飲んでいる。と、家族の評判はすこぶる良くない。しかし、私に言わせれば、「これが飲まずにやっついていられるか」という心境である。

(了)